

「研究テーマ」

新聞から考える ～視野を広げ、伝える力の育成～

園田学園中学・高等学校

教諭 本田 有加子

1、はじめに

「新学習指導要領」に記されている通り、学校教育においては、言葉を通じて的確に理解し、論理的に表現する能力が求められている。

今年度、「NIE 実践指定校」としての認定を受け、本校では中高一貫教育を活かし、教科等の枠を超えて取り組むことを目指した。全ての教科に通じる、「読み・解き・書く」ことの力は、まさに「国語力」にあり、それを「新聞を読む」という行為を通じて学ばせることが、大きな狙いであったためである。

社会の事象を知り、自らの意見を持つ、ということは、本校の掲げる高校人権教育プログラム「自分を知る」「他者を知る」「社会を知る」こととも連動しており、自己を社会と結びつける一つの契機としても、取り組むことの意義は大きいという認識に立って、その活動をスタートさせた。

以下、校内で「NIE推進委員会」を立ち上げ、中学校・高校・コース・教科と、それぞれに企画提起し、実践した内容を報告する。

2、実践内容

(i) 新聞の配置

新聞6紙の購読開始を9月から行い、対象学年を限定することで、その取り組み内容を明確にすることから開始した。

まず、中学校では全学年で取り組むこととして、新聞の設置場所を放課後等に自学習を行う「SPルーム(ステップアップ・ルーム)」とした。高校では、特別進学コースの高1・高2の各教室に置くことで、確実に生徒が手に取る機会の設定を意図した配置を行った。

(ii) 中学校の実践内容〈対象：全学年〉

語彙力を高め、文章を書く力を身に付けさせたいという観点を持って、活動を行った。大きくは2学期末に行った、新聞で新聞をつくる「NIEコンテスト」である。自らが興味を持った記事を選び出し、そこからグループとして一つのテーマを設定し直し、一枚の新聞を制作するというものである。発見し、議論し、探求する姿勢が必要であり、自己の考えを深めていく作業が求められた。

【学習展開】

1) 夏期課題

新聞記事をスクラップし、感想を書く。

2) 派遣記者による講演

毎日新聞社記者、山田毅さんによる講演。

テーマ：「新聞ができるまで」

3) 「NIEコンテスト」の実施

クラス内でグループを作り「総合的な学習の時間」等を用いて、新聞を作成する。

まずは、夏期の課題として、新聞記事をスクラップさせ、簡単な感想を書かせることから意識作りを始めた。自己の考えを掘り下げ、伝える工夫についての指導が課題となったが、ここでの作業が、「NIEコンテスト」に取り組むための第一の下地となった。「新聞で新聞をつくる」ためには、一つのテーマを設定し、そこから木の枝を広げていくように、調べる内容を見つけていくという思考方法が求められる。そうした発想の広がり、記事を構築していく上での内容の豊かさに繋がっていくためである。また、制作した新聞に対して各班ごとにプレゼンテーションを行い、(写真1・2)、中学校の全生徒による投票でグランプリを決定するなど、着眼点、内容、プレゼンテーション能力など、総合的な学びの姿勢が求められるコンテストとなった。



(写真1・2) プレゼンテーション

(iii) 高校の実践内容①

〈対象：特別進学コース1・2年生〉

「物事を論理的に捉え、記述する力をつける」として、特別進学コースでのNIEの活動を行った。「新聞を読む」ということは、単に新聞の文字を追うのではなく、社会情勢・歴史上の出来事に対する理解があってこそのものであり、それを抜きにして読み解くことは困難である。「現代文」等の、「現代について書かれた」評論を読み解く際にも、その姿勢は必要であり、また、日本語も英語も、「文章を書く」ということにおける力が、受験を見据えた文章記述対策にも繋がるため、その点を意識させて積極的に取り組ませた。

【学習展開】

1) 1年生：「語彙力検定ワークノート」

2年生：「天声人語ノート」(写真3・4)

それぞれ夏期講座の宿題として提示。

2) 外部講師による出張講義

・大阪経済法科大学 前田幸男先生

テーマ：「原子力政策と電気代の関係」

・甲南大学 石川路子先生

テーマ：「経済学って何だろう？」

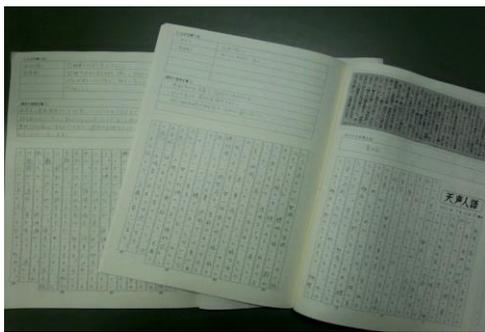
3) 「小論文講座」の実施(写真5)

時事問題に関する意識付けとして、新聞を読むことの意義についても話が及んだ。

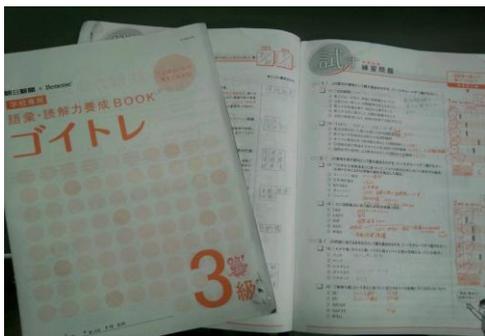
「天声人語」ノートに取り組んだ生徒からは、30日間続けることに対する戸惑いの声も聞かれたが、結果として「知識が増えた」「新聞が教室にあることで読む機会が増え

た」などの声が聞かれた。「語彙力検定ワークノート」についても、時事用語についての解説などがあるため、多くのことを知る契機となった。事実、授業の中で、関連する「iPS細胞」や「脳死」について話題を振ると、生徒の反応が良く、「社会を語る土台」形成に繋がっていると感じられた。様々な出来事に対して持論を持たせるためにも、新聞を読むという行為は重要である。

また、小論文講座を通して、自己の考えを文章化することの意識付けができ、時事問題に対応する知識を持つためにも、新聞を読むことが有効であるという再確認に至った。



(写真3)「天声人語ノート」



(写真4)「ゴイトレ3級」



(写真5)「小論文講座」受講風景

(iv) 高校の実践内容②

〈対象：総合進学コース1年生〉

高校1年生の「世界史B」の授業において、「世界史新聞」を制作させる課題に取り組みさせた(写真6)。日頃手にしている新聞紙面を通じて、そのレイアウトや構成、表現力に触れさせ、自身の着眼点を持たせることを、その目標とした。内容としては、歴史的な出来事に対する知識や表現力を問うものであり、いずれの新聞にも創意工夫がみられた。

【学習展開】

1) 「世界史B」の冬期課題

「世界史新聞」制作 B4 1枚

自分にとって、最も関心の高い歴史的イベント、事象を取り上げ、その当時の新聞記者になりきって、記事を書く。

2) 「世界史新聞」コンテストの実施

145点の作品の中から生徒による投票によって20点を選び出し、さらに教員による投票で優秀賞等を決定。

「当時発行された新聞のつもりで記事を書く」ということに、生徒一人一人が意欲を持って臨んでいたことが、提出された新聞から窺うことができた。日頃にする新聞と同じように、書籍や商品の宣伝をうたった広告を下段にレイアウトし、論説を書くなど、読み手を意識した紙面づくりの工夫もみられた(写真6)。

また、同じ「フランス革命」を取り上げて記事を書くにしても、その視点はそれぞれに

異なるため、取り上げた人物に対する肯定的見解・否定的見解が記事の内容に見てとれた。そのことを、互いに制作した新聞を評価し合う中で生徒自身も感じ取り、日頃手にしている新聞についても、同じ事件を取り上げながら論点が違うこともあるのではないかと、という視点を持たせることへと、自然と繋がっていくことができた。

生徒が選出した優秀作品20点は、その後廊下に貼り出し、教員による投票によって、最優秀等を決定した(写真7)。



(写真6)「世界史新聞」最優秀作品



(写真7)「世界史新聞」コンテスト

3、成果と課題

中学や高校、コース、教科の枠を超えて、「NIE推進委員会」を立ち上げたことが、実践指定校としての認知を校内で共有する上で効果的であった。その結果、様々な活動を初年度に行うことができ、次年度へとその取り組みを引き継ぐことが可能となった。

中学校で実施した「NIEコンテスト」については、他の行事との関係性から、時期をずらして実施し、派遣記者による講演との連動を目指す形で取り組むことを検討している。また、特別進学コースにおいては、朝日新聞社が作成している小論文用ペーパーや書くことのトレーニングを視野に入れた取り組みを継続させる方向で検討しており、新聞を読み、持論を持つことへの関心を高めていく機会を多く投げかけていきたいと考えている。

加えて、社会科で実施した「世界史新聞」コンテストは、次年度、コースを超えて取り組ませる方向で企画をしており、今年度以上に「伝える力」の育成を目標として、新聞への関心から社会への関心へと繋がる学びの充実を目指して、その取り組みをすすめていくものとする。

「新聞を読む」という行為を一義的なものとせず、広く「自己を知り、社会と繋がる」契機となるようなものとして、教科等の枠を超えての新聞活用の実践模索も、併せて次年度の課題としたい。